

中学校における ICT の活用

横手南中学校 戸巻 志穂

<はじめに>

コロナウイルスの感染が拡大し、リモートの授業や仕事が促進されてから久しくなりました。私が勤務している横手市では、小学3年生から高校生までの児童・生徒一人ひとりに iPad が貸し出しされ、よりよい学びにつなげることを目標に、教師・生徒共に日々よりよい方法を模索してきました。

しかしながら、iPad やインターネットを活用した授業構想を求められる中で、数々の問題点が浮き彫りになったのも事実である。1つは、ICT の利活用の仕方を教えるスタッフが不足していること、もう1つは、授業をする教師の中で、ICT を活用した授業を受けたことがある教師がいなかったということである。そのような状況下でも、「とにかく、やってみる。」を全職員のスローガンとして掲げ、ICT をなんとか授業に取り入れ、互いに情報を共有しながら新しいアイデアを生み出してきた。

私が授業で ICT を活用するにあたり、2つのことを意識している。1つ目は、「生徒と世界を繋ぐこと」、2つ目は「思考を共有する事」である。コロナ禍で外国との往来や、容易に人を学校に招くことすらできない状況下で、生徒たちと世界を繋ぐには、ZOOM を使った授業が適していると考え、友人の協力を仰ぎながら授業実践に踏み込んだ。また、大画面のテレビや MetaMoji という学習ツールを用い、考えを発表したり、友達の発表を聞いて新たな考えに触れたりすることが出来るようになる。1人ではなく、クラスメイトがいるからこそできることを、ICT を通して促進していきたい。

<実践例>

①NEW HORIZON 1 Stage Activity 1 “All about Me” Poster

<単元と ICT 活用場面について>

生徒たちが4月に出会い、5か月が経つ中、「自己紹介ポスターを必然性のあるものにできないか」と考えた結果、「自分自身や学校の紹介を他者に行う」というアイデアにたどり着いた。コロナウイルス感染拡大が海外との往来や国際交流を妨げる中で、「日本の学校に興味がある海外の方（マレーシア出身）に、自分自身や、簡単な学校紹介を行う」という場面設定をすることで、生徒の学びに向かう意欲を引き出した。また、zoom を通して実際に外国の方とリアルタイムで話すことにより、学んだことの良さや

達成感を実感できるよう ICT 活用における工夫を施した。

<実際に授業を行って>

- ・上記で述べたように、ICT 活用をすることで生徒の目的意識がさらに明確になり、また、それに伴い、学習意欲が高まった。生徒たちは、会ったこともない人と、また、英語でやりとりするというところに大きな緊張感を感じていたものの、既習表現を一生懸命駆使して表現しようとし、また、相手の質問に英語で答えたり、相手のリアクションを楽しんだりなど、リアルタイムでできることの良さを生徒も私自身も再確認できた授業実践となった。
- ・「自分たちの学校について知ってほしい」という思いから、話合いの段階から積極的に iPad で適切な単語や表現方法を調べたり、相手を喜ばせるためにマレー語のあいさつを調べて発表に取り入れたりなど、主体的に必要なに応じた ICT 活用をする場面が見られた。教師の指示を待つだけでなく、自己調整をし、自分に合った ICT の活用方法を身に付ける生徒の育成が、少しずつだができていると感じる。
- ・今後、このようにまたオンラインでやり取りできる機会を設けるとしたら、発表後も互いに質問や会話をする時間を多く設け、成功体験だけでなく、「もっとちゃんと聞き取りたいのに」「こんな風に伝えなかったのに！」などのもどかしさを感じる場面を加え、自分の英語学習に必要なものは何かを模索するきっかけを与えたい。



<実践例>

②NEW HORIZON 2 Unit 5 Universal Design

<単元と ICT 活用について>

身近にあるユニバーサルデザインを知ると同時に、その歴史を学ぶことによって、ユニバーサルデザインが自分たちの生活にどのような影響を与え、また、人々のために役

立っているかを考える単位である。「ユニバーサルデザインとは、年齢・身長や体重・国籍・性別・障がいの有無に関係なく、全ての人々が安心して暮らせる町や建物、安全な製品を作ろうとする考え方」であることを踏まえ、「自分たちの学校はユニバーサルデザインになっているか」「自分たちに必要なユニバーサルデザインは何か」ということを学校探検を通して考え、それぞれが新たなユニバーサルデザインを考案し、英語で発表した。その際に MetaMoji Classroom というソフトウェアを用いてデザインを作成し、全体共有も効率的に行えるように工夫をした。

<実際に授業を行って>

- ・学校を探検し、そこから得た情報を基にユニバーサルデザインに対する自分の考えを広げ、発信するという活動を通し、目的意識が明確で、且つ必然性のある授業を行うことが出来た。身近にあるユニバーサルデザインをインターネットで調べたり、教科書から学んだりすることで、「これもユニバーサルデザインだったんだ!」「自分のデザインの参考にしてみよう」と、新たな発見をすることができていた。
- ・紙やペンではなく、MetaMoji を通してデザイン作成をし、訂正や編集が簡単にできるようになり、生徒たちがより意欲的に興味をもって活動に取り組んでいた。
- ・教師用アカウントを通して生徒1人1人のページを確認できる機能があり、それぞれの進捗状況を iPad で見ることが出来るため、必要な声掛けや支援がしやすくなった。
- ・教室の電子黒板に iPad を接続し、大画面での全体共有をすることによって、生徒たちが互いから新しいアイデアを得たり、新たな発見をしたりすることがしやすくなった。実際の振り返りには、「自分が考え付かないようなアイデアをもつ友達が多く、勉強になった。」「英語が苦手だったけど、この活動を通して、自分の考えやアイデアを英語で伝えることが楽しくて仕方なかった。他のユニットでもこのようなことをしてみたい。」などがあり、生徒たちの英語学習への意欲を高めることができた。



＜成果と今後に向けて＞

3年間という短い教師生活の中ではあるが、ICTの活用の有無で、生徒の意欲や学習に取り組む態度に大きな違いが出ることに驚いている。ICTを活用すること自体におもしろさを見出し、それに加え、ZOOMや市で指定しているソフトウェアを利用することにより、自分たちの限りない可能性に気付くことが出来ているのではないかと考える。従来の、「知識を得、それをテストで活用・応用する」といった授業から「自ら学び、発信する」という能力が求められる時代に生きる今の児童・生徒には、さらに効果的で創造的なICTの活用能力の向上が求められるだろう。紙とペンが教育に繋がり、世界を変えるのであれば、ICTは実現可能な世界を広げることに繋がると確信している。

しかし、ICTの活用を進めるにあたり、問題点が現れたのも事実である。児童・生徒の不適切なICTの使用、人の話を聞かなくなる、友人とのトラブル等、情報活用教育だけでなく、情報教育も念入りに行わなければならない状況になった。「ルールを守る」「人の話は顔を上げて聞く」等の「人を尊重する心の育成」の大切さを再確認する必要性を痛感している。日々の関わりや、道徳の授業を通し、自分事として問題を捉え、解決に向けて思考できる生徒を育てたいと考える。

英語の授業においては、ICTを闇雲に使うのではなく、生徒を軸足に置き、活用が必要な場面を見定める必要がある。例えば、小学生や中学1年生の最初の段階では、「話すこと」に焦点が置かれているため、英語を書くことに慣れていない児童・生徒も多々いる。その場合は、自分の手で英語を書くことに慣れ親しむため、紙媒体のワークシートを配付した。時間が経ち、慣れてきたところで、英語のタイピング練習も兼ね、MetaMojiを通してワークシートを配付するようになった。今となっては授業のワークシートはほぼデータにしており、ライティングのチェックや、回収が必要な物のみ紙媒体で配付するようにしている。

ICTが学校に導入されたことにより、自分自身の働き方も大きく変化した。従来であれば、作ったワークシートを人数分印刷し、仕分けをする時間にかかなりの時間を割き、紙も大量消費していたが、データで配付することにより、その手間が一切なくなった。その時間を更なる教材研究に充てることができ、嬉しく思う。

今後は、「とりあえず使ってみる」から、「効果的・創造的な活用方法を探る」ことを目標に、日々研鑽し、生徒たちのよい学びに繋げていきたい。これからの時代を生き抜く子どもたちが、力強く、自信をもって自己を発信していけるようになることを心から願う。